

A)

自分たちのチームにない解決策を提案し、参考になったのは「オムライス」と「FOODS」であった。オムライスは道路環境そのものの改善を指摘しており、公共交通機関の利便性向上を考えていた自分たちの班にはない考えで、組み合わせたらもっと良くなるのではないかと参考になった。

「FOODS」は自分たちと似た考えで、公共交通機関の利便性を向上させることを解決策としていた。しかし、その方法が異なっており、地域限定の仮想通貨を発行し、循環させることで解決するという発想は自分たちには出てこなかったもので、とても参考になった。

B)

自分たちは交通問題の原因として公共交通機関の利便性が不足しており、その結果として自動車への依存が進んでいることを考えていた。そこに、オムライスの発表を聞いて、高齢社会の中、高齢者が関わる事故が多い、また車社会のため、事故の潜在的リスクが高いことを追加する。自動車依存は、交通事故の増加や高齢者事故、環境負荷の拡大、渋滞の発生など、さまざまな交通問題を引き起こしている。これらの問題を解決するためには、公共交通機関の利便性向上と、道路環境そのものの安全性向上を同時に進めることが重要である。

公共交通機関の利便性を高める具体的な方法として、配車アプリを活用したデマンド交通の導入が挙げられる。これにより、利用者は必要ときに交通手段を利用でき、自動車を使わなくても移動しやすくなる。また、バスやタクシーを利用した人に対して地域商店街で使える利用券を配布することで、公共交通の利用促進と地域経済の活性化を同時に図ることができる。

さらに、インターネットを用いたアンケート調査や過去の利用データを分析し、朝夕など利用者が多い時間帯にはバスや運転手を多く配置する。一方で、需要の少ない停留所や時間帯はバス路線を廃止・縮小し、不便になる人についてはデマンド交通で補う。このように需要に応じた運行を行うことで、利用者の増加や運転手の労働環境・給料面の改善も期待できる。

しかし、公共交通機関の利用が増えても、道路そのものが危険であれば交通事故はなくなる。そこで重要となるのが、光と音を活用した交通安全対策である。車線やカーブ、交差点、横断歩道など、特に注意が必要な場所を光らせることで、運転者や歩行者に「どこに注意すべきか」を自然に伝えることができる。文字による注意喚起と違い、視覚的に直感的に理解できる点が大きな利点である。

また、視覚情報だけでは気づきにくい場合に備えて、音による注意喚起を行うことで、より高い安全性が確保できる。音は視線を向けていなくても認識できるため、よそ見防止や居眠り運転の防止につながるほか、視力に不安のある人や高齢者にとって重要な情報となる。このように、光と音を組み合わせた仕組みは、誰もが利用しやすいユニバーサルデザインの考え方に基づいた対策である。

この仕組みは時間帯によって使い分けることが効果的である。昼間は周囲が明るく交通量も多いため、光は強くしすぎず、必要に応じて音で注意を促す。夜間は視界が悪くなるため、光をより目立たせ、音は小さめにすることで安全性を高めることができる。さらに、雨や霧、雪などで見通しが悪い状況でも、光によって走路の位置やカーブの形が分かりやすくなり、事故の防止につながる。

このように、公共交通機関の利便性を向上させて自動車の利用を減らすことと、光と音を活用して道路環境の安全性を高めることを組み合わせることで、交通事故の減少、高齢者事故の防止、環境負荷

の低減、そして誰もが安心して移動できる社会の実現が期待される。これらを総合的に進めることが、より良い交通問題の解決策であると考える。